

## 私の仏教保育

田中 恵 康

(和歌山・蓮心寺住職)

現在、私共をとりまく環境は、物心共に非常に早いテンポで揺れ動いています。特に科学技術の発達が目ざましく、人間の生命までも自由に操作出来る時代になってまいりました。

ところで欧米では、十七世紀にすでに「知は力なり」と、あらゆる科学が近代科学として目じる押しに登場し、十八世紀には、これらの科学の成果にともない、次々と新しい技術によって生れる産業革命が起り、これによって、人間の生き方が一変致しました。手作業から機械化へと、従ってそれとはうらはらに、人間疎外・人間不在の現象も芽をふきはじめて来たのでございます。

しかし今、我々の周囲に起りつつある変革は、原子力やコンピュータ、或は光ファイバー等をまつまでもな

く、この「知は力なり」で発展して来た巨大な科学と技術にもとづくものであり、さきほどの産業革命などは、スケールの違った全く大きな変革であります。それは、人間が自然を、人間を、宇宙を破壊することが出来る。破壊という言葉を変えて申すならば、創造するとも言いましめようか、創り出すことができるという変革でもあります。科学技術の高等な発達が、一般民衆の生活に合理的な考え方を普及させたことは、ひとつの大きい進歩ではあります。その合理性が、ややもすると、一面的、或はその場かぎりの合理主義や分析にのみ走り、我々宗教家のように、物事を總体的にとらえて、本質を見極めようとする姿勢・態度が欠けてまいるのではないかと存じます。

又、経済の高度な成長は、国民生活の間に物質中心主義や享楽、刹那的な態度が形成され、人生の意味や生活上の当面する問題の処理の仕方にさえも、又、或は物事を広く、かつ深く、更に究極的につきつめて考えることが、なおざりにされがちになってしまいます。こうした

社会面での変革は人間疎外や人間不在の現象に拍車をかけているわけでありませう。

ところで人間の子供は、この様な大きな変革が行なわれている現在とは知らずに、かつての昔と同じように、今も直径〇・二ミリの受精卵から始まる小さな個々の生命として、この地球上に繰返し繰返し誕生して参ります。人類自身がつくり上げた変革の、いわば大海の荒浪の中へ、何も知らずに、唐突に生れてくる、その個々の小さな生命が、やがていきいきと目を輝かせて、この人類の大海の未来を「人間の魂」「人間の心」で切り開いて行けるか、どうかの一つの大きな鍵は、実に乳幼児期の教育にかかっているのではないかと私は考えております。又信じてもおります。

最近、全国各地に巻き起っている青少年非行や校内暴力、又家庭内暴力などの旋風は、まだまだくすぶり続けています。しかも、その暴力が親や教師に対してということ、今までの暴力とは異質のものになっています。

自分達の先生に、暴力をもって立ち向い、傷害事件まで引き起こすという現状は、今までの親や教師には想像すら出来なかつた事でありまして、もはや我々がもつ親子の関係、教師と生徒の関係の尺度では測り得ない関係が、子供たちの心を支配しつづつあると思われませう。

登校拒否、或は自殺、また最も陰質な弱者に対する暴行、昨年一月から二月にかけて、横浜市内の公立中学校の生徒十人ほどが公園などで寝ている老齢の浮浪者たちを、次々と連続的に襲う事件がありました。面白半分に踏んだり、蹴ったり、殴ったり引きずり回したりして、浮浪者のうち三人が死亡し、十三人がけがをしたということ。彼等少年達は、うさ晴らしに弱い者をいじめ、相手が抵抗出来ないの図に乗って攻撃が拡大したというわけであります。しかも取調べに際して、スカートとしたりとか、こんな事ぐらいで何故捕まるんだといつてのけたということ。罪の意識が全く無かつたということです。

この事件のあと、間もなく、今度は東京の町田市の、

これも公立中学校内で原爆の被災者である先生をからかい、追いかけた。がまんの限界に達した先生が持つていた果物ナイフで生徒を刺すという事件がありました。先生が教育者と自制していることが、少年にとっては、抵抗できない弱者としか見えないのでありましょう。身近かにいる、格好のうさばらしの対象であったはずの教師が、教師も反撃するのか、と少年にとってはショックであったかもしれません。

ついこの間、テレビを見ていますと、何と、生徒同志の中にいじめられっ子がいる。これは表面には出ていませんが、どこの学校、クラスにもあるようです。ところが、そのいじめられっ子がいじめられないよう自衛方法を教えている塾まで出ていて、けっこう繁盛している様子が放映されていました。

十七世紀からふつふつと芽を吹き始めた人間疎外・人間不在の現象が、今、青少年の非行・暴力と爆発的な行動となって現われ、それに触発されて大人たちは、やれ入試制度が悪いからだ、偏差値がどうだ、とそれらの対

応を模索しているのが現状でございます。ドロ繩式の未端的な対応だけで、この問題行動の解決を見ることは出来ないうであります。

これは人間形成の根幹をなす、人間らしく生きる方向性の問題であると思うのです。今ほど宗教家特に仏教者の果たす役割を問われている時代はないと考えます。それも〇・二ミリの受精卵からはじまり、うぶ声を上げた乳幼児期に、しっかりと「人間らしく生きる魂」の芽生えを培うことの重要性を強く強く思うのであります。

古来から「三つ子の魂百まで」といわれる通り、乳児の時に形成された行動の基本的なデッサンは、その子の一生のマスターライトになるということは、科学的にも経験的にも数多くあり、裏付けされています。また、いだって観念的な「人間の魂」という言葉も、今日では自然科学で証明され、語る時代になっていきますが、私は宗教家として、特に本宗の見地から、幼児の純白の心に南無妙法蓮華經の七文字を明るく、清くデッサンすることを念じて、次代に生きる子らを教化して行かなければなら

らないと思うわけでございます。

そこで、少しく我が園の紹介をさせて頂きますが、本園の建学の精神は、「明るく清い心と行いの芽ばえを育成する」でありまして、これはいうまでもなく大聖人御聖訓の「明らかなること日月にすぎんや、淨きこと蓮華にまさるべきや、法華経は日月と蓮華なり。故に妙法蓮華経と名づく。日蓮また日月と蓮華の如くなり」、この御聖訓を基盤とした建学の精神であります。

我が園の教師職員自身が「日蓮宗保育」の研究を深め、日蓮宗の信仰と信念をもって子供に接することに努めております。それには教師職員の朝礼の際、唱題の斉唱を通して大聖人に今日一日の御守護を祈念し、持てる力のすべてを子供に投入できるようにお誓いし、又終礼の時は唱題をもって感謝の祈りを、園長以下全職員で行っております。

他宗派の教師のなかには、当初、「お題目」に抵抗を感じた者もいましたが、それがひと月ふた月と日を経るに従って、「日蓮さま」(当園では祖師の呼称を日蓮さまに統一

しております)に親しみを感じて来たと告白をした教師や運転士もいました。更にその教師は非常に熱心に大聖人のご生涯を知ろうと勉強し、今では入滅会のお話等テレビ放映して子供に聴取させる所まで成長致しております。私としては誠に大きな喜びでございます。

私は園においては運動会・遠足・一泊修園旅行・保護者会・入園・卒園は勿論、全部道服折五条で対応致しております。これは、園児は勿論、保護者或は訪問者に強く仏教園、殊に日蓮宗の幼稚園であることを訴え、かつ親しみを抱いて頂く為の、私のささやかな精神であります。ごくたまに洋服姿で園に入っていくと、子供は「園長先生何処へ行くの。東京へ行くの?」と不思議そうに問いかけて参ります。我が園の子供は法衣姿に何のためらいも無い、この些細な事にも仏と子供の御縁を結ばせて頂いた、という喜びが、私の日蓮宗保育を支えてくれている一つの励みにもなっているのでございます。

園児は登園致しますと、先ず本堂の前に整列(バス通園が大半のため)合掌して「み仏様お早うございます」と朝

のご挨拶をすませたのち保育室に入ります。全児揃うと朝の礼拝になります。この時、唱題三唱、三百余名の幼な児の清らかな「南無妙法蓮華經」の聲が園内にこだまして、まさに感動のひとつでありました。「我此土安穩……散仏及大衆」が顕現されている一瞬でございます。子供らの心の中にいついっまでもこの感動が累積し、何時か芽をふくことと信じております。又大聖人も多勢の幼な児の唱題をさぞやご満足下さって居られることを自負している次第でございます。

年長児は給食前後に「食法」を行っております。これに対する父母の聲は、宗派を問わず感謝してくれております。園児の父親から、次のような手紙を頂いた事もあります。

もみじのような手で合掌し乍ら、「天の三光に身をあたため、地の五穀たましいに身を養う。みなこれ本仏の慈悲なり。唱題三唱」。年長組になつたばかりの次男が声高らかに唱えます。これが我が家の夕食の膳を前にしての行事です。私達家族五人も共に手を合しお唱えする様に次

第に順応されました。日頃多忙な仕事のために子供の面倒など何ひとつ見てやれない私にとって、たまに夕食を共にするとき、こうして一緒に合掌し心の中で賞めてやるのがせめてものことなのです。感謝の念を培つて下さる貴園の教育方針と同時に、親達が平素しつていたいと思いつつも出来ないでいることを、先生方は見事にこれを果して下さっているのだと感服しています。

というのです。又最近、或る東京の有名私立大学に入學した卒園児と、ふと南海電車にて同席になりました。従つて話は幼い頃の想い出話等に花が咲きましたが、その中で大学入試の時、答案を前にしてはつと無心に「南無妙法蓮華經」と唱えたと言うのです。私は声には致しませんでしたが、思わず「やった」と心の中で叫んでいました。この青年は他宗の家の子供でしたが、お題目はこの青年の体内に生き続けていたのであります。この一日は私にとってこの上もなき佳き日でありました。

この様に、食膳に向つての報恩感謝の気持ちは、何人

にとっても大切なものであります。この大切な気持ちを  
はつきりと言葉で表すことが出来るように、只今の青年  
のように最大難関の大学入試に自然にほとばしり出て来  
る——青年にとって、お題目は正に自分のものであるわ  
けでありましょう。私共はたゆまず努力・精進を重ねて  
日々の保育にいそしんでいるものでございます。そうし  
てこの努力・精進が子供の心の中にすくすくと若木の如  
く伸びる事を念願している次第であります。

## 青少年問題を考える

丸 井 良 光

(兵庫・妙福寺住職)

青少年問題を考える、ということに参加させていただ  
きました。今日は、「心を育てる教育」を中心に、私の  
教職経験を通してのお話しを申し上げます。

現代っ子を表現する、「五無主義」という言葉がありま  
す。無気力・無感動・無関心・無責任、その上、不作法

であるということです。最近、さらに「依頼心が強くて  
甘ったれ」で、おまけに「直ぐ怒る」という傾向が加わ  
ってきたのです。

また、自殺願望の生徒が増加してきているという、実  
に憂慮すべき事態が発生しているのです。

今年になってからも、中学校の先生に聞いてみたので  
すが、やはり、作文の中にそのような考え方がみられる  
し、その傾向が感じられると言っています。

何故、子供達が自殺願望をするようになるのでしょうか。  
それは、自分の周囲の大人たちをみて失望している  
のです。

「大人は大うそつきだ。良いかつこうばかりしてい  
る」、そういう大人社会への不信感が自分の将来に不安を  
感じ、夢も希望も実現できそうにない、そういう世界へ  
自分が入っていきたくない。だから大人になる前に、自  
分を消してしまいたい、と自殺への道をまさぐり、やが  
て、日常の些細なことでも、自殺へ踏切る引金となって  
しまうのです。